



阪本是丸氏

令和元年度の國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会は、阪本是丸氏（國學院大學研究開発推進センター長・神道文化学部教授）を講師に招き、「折口信夫と神道・国学―異訳国学ひとり案内―から『神やぶれたまふ』まで」と題して、令和元年十一月十六日（土）、本学学術メディアセンター棟常磐松ホールにて開催された。当日の会場には、二百二十人を超える参加者が集い、熱心に聴講した。

公開学術講演会
「折口信夫と神道・国学」

阪本是丸（國學院大學教授）

概要

はじめに

講演の導入として阪本氏は、学問として歴史的に過去の人物や出来事というものは、なるべく正確に調べ、伝えなければならぬと指摘。さらに、およそ四十年に亘って研究してきた自身の「国家神道」研究の切り口にも言及し、まず見取り図として、制度的なものを見渡し、それがどのようなイデオロギーや考え、情念等を背景にして出来上がったのか、それぞれを個別に、正確に検討する必要があると考え、研究に着手したことを述べた。

そして、明治維新とともに、一つの大きな日本の転換点であった昭和二十年の敗戦に至る昭和前期の時代に生きた折口信夫の神道、国学論を考えるに当っては、当時の時代背景や、神道、国学的な考え、折口と國學院大學、神社界との関わりや人脈、或いは新国学も含めて、「国学とは何か」ということを踏まえて考えなければならぬと指摘。ま

國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース
Vol.13 No.2
発行人 武田 秀章
編集人 大東 敬明
〒150-8440 東京都渋谷区東 4丁目10番28号
電話 (03) 5466-0104
FAX (03) 5466-9237

目次

公開学術講演会
「折口信夫と神道・国学」(宮本誓士) 1
日本文化研究所 ワークショップ
「生活の中で直面する世界の宗教文化―食・服装・忌避などへの理解」(星野靖二) 3
日本文化研究所
「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」(齋藤公大) 4
古事記学センター
「古事記学」の推進拠点形成―世帯次代に語り継ぐ古事記の先端的な研究・教育・発信―事業報告(渡邊卓) 5
古事記学センター
国際ワークショップ「近現代日本の宗教文化と「古代」」(平藤喜久子) 6
南開大学外国語学院との学術連携について(渡邊卓) 7
研究開発推進センター
「神社との連携事業について―霧島神宮、北海道神宮、乃木神社の研究―」(宮本誓士) 8
國學院大學博物館
企画展「浮世絵カールス・コレクシヨン―江戸の美少女・明治のおきやん」(國學院大學博物館) 9
國學院大學博物館
企画展「和歌万華鏡―万葉集から折口信夫まで―」(渡邊卓) 10
國學院大學博物館
特集展示「王権と古墳―倭国統合の象徴―」(深澤太郎) 11
國學院大學博物館
企画展「大嘗祭」/特集展示「即位礼」(大東敬明) 12
國學院大學博物館活動報告(國學院大學博物館) 13
資料紹介「高松宮家旧蔵ボンポニエール」(高野裕基) 14
た、戦後の「神やぶれたまふ」という折口の詩に付された反歌において、「敗れても神はなほまつるべき」と書いてあることに言及し、それは結局のところ、「神とは何か」ということに繋がると述べた。

・十人組徒党事件の背景
続いて阪本氏は、昭和前期という時代に生きた折口信夫との出会いは、國學院大學における「十人組徒党事件」であったことに言及。折口の年譜における昭和八年の同事件に関する記述を紹介した上で、その背景となった当時の國學院大學や時代状況などについて、次のように説明した。

り、学部といえば、大学、文学部のことを指した。学部には、道義学科、国史学科、国文学科の三科があったが、学生は少なく小規模な大学であった。また、教員としては、後に國學院出身者として初めて学長になり、当時の國學院、国学・神道を牽引した河野省三、西洋哲学を専門として、弁論部の顧問でもあった松永材などがいた。

当時の國學院大學には、国家・社会を何とかしなければならぬという青年将校のような考え、あるいは様々な思想家、運動家の影響もあり、それに反対する左翼の学生達もいて、各所で弁論大会が行われた時代であった。また、昭和七年には五・

一五事件、翌八年には神兵隊事件があり、軍事教練や配属将校の問題等もあって、「十人組徒党事件」とは、そうした時代背景の中で起きた事件であったことを考える必要がある。

さらに、もう一つの背景として、大正七年に公布された「大学令」により、大正九年に慶應義塾、早稲田、中央、法政、同志社、日本大学とともに、國學院大學が専門学校から大学へと昇格したが、その際、本学は他の大学とは全く異なる形態をとったところに特徴がある。本学と同時に昇格した中央大学、法政大学、日本大学は同じ名称の財団法人が運営する大学となり、慶應義塾大学と同志社大学は、財団法人慶應義塾、財団法人同志社であったが、本学は財団法人皇典講究所が設置する國學院大學、つまり法人名と大学名とが一致しない大学だった。

そして、稼ぎ頭は國學院大學であるが、財団法人皇典講究所に力があるという状況に対し、不満や改革の要求が学生たちから出てきた。「十人組徒党事件」とは、このような大学の状況や時代背景のなかで起こったものである。未だ同事件については不明な部分も多いが、いずれ背景や事実がわかる日が来るように、本機構の校史・学術資産研究センターにおいて従来の記述を再検討していく必要がある。そうすることで、折口の本学や神社界における位置づけも分かってくるのではないかと述べた。

・「異訳国学ひとり案内」掲載の背景
また、神社界に深く関係する國學院の教授であった折口は、最初から最後まで神道人だったのであり、武

田祐吉、山本信哉、植木直一郎も、「天皇」や「惟神」について当時様々に議論し、発表もしていた中で、折口も神の観念や天皇について真剣に考えた一人であったことに言及。そして、こうした折口論が当時、影響力を持ったかどうかということよりも、様々な学者が議論していた時代状況を踏まえながら、等身大の折口を見るべきであること、むしろ戦後になって折口論が肥大化したことは事実であると述べた。

また、折口とこれらの学者達との葛藤があったことは雑誌等にも確認されるが、たとえば、大正九年に発表された「異訳国学ひとり案内―河野省三足下にさ、ぐー」(『國學院雑誌』第二十六巻十号・十二号)の背景には、『國學院雑誌』の改革に意欲を燃やしていた折口の姿勢があることを指摘。そして、「わからずやどもと喧嘩する迄は、やつてみよう、と思います」とある小林謹一宛の書簡等からは、改革のためには労を惜しまない折口の性格が見えることに言及した。そして、国学とは単なる国民道徳ではないという信念から、『國學院雑誌』の改革に意欲を保持していたことを述べた。

また、こうした経緯や背景を理解する方法として、雑誌や資料を丹念に読み込むこと、それが出版された状況についても考えることが本誌の意味での研究になることを指摘。雑誌のある部分だけを見ても研究することが可能であるが、全体を見渡すことが必要であり、特に編集後記の内容を考えることが重要であるとの見解を示した。

そして、折口の性格の一面である

「改革精神」というのは、神社界に對しても同じであり、自分自身の神道論をどのように浸透させていくのかについても、一種の戦略を持っていたことを述べた。

・短歌への想い

また、短歌と学問を両立していた折口は、弟子に對しても非常に厳しかったことに言及し、神社界の戦前における機関誌であった「皇国時報」の歌壇の選者になった際には、選者になった以上は、今までのような生ぬるい歌ではだめだ、もっと厳しくやると書いていることを紹介した(同八一五号)。

さらに、戦後の『神社新報』における歌壇の選者になった際も、歌、作歌、創造に全身全霊をかけるという姿勢は変わることなく、歌人としての釈道空と折口信夫とは一体化した人生であったとした。

・むすび―折口信夫の神道・天皇論

また、学術雑誌だけではなく、大衆が読むような雑誌にも数多くの文章を書いていくことから、単に象牙の塔だけで語っているのではなくて、何かやりたいものがあつたのだらうと指摘。その根本にあるのは、神道、天皇であらうと述べた。

そして当時、「神ながらの道」を説いた筧克彦の神道論が社会に強い影響力を持っていたことに言及し、折口が筧神道を幾度か学問的に批判したことに触れた上で、当時の時代状況や人々が言っている内容をトータルに見て考えていくことが重要であるとの見解を示した。

こうした折口信夫の神道・天皇論

に関する結論として、折口には、明治天皇に對する敬愛・思慕の念があり、敗戦後もそれは変わらず、生涯続いた事を指摘。このことは、折口が「神やぶれたまふ」と詠んでから七年後、昭和二十七年に作られた「明治天皇」と題する詩に結実したと述べた。

そして、「現目に 我は仰げり 明治の御代の御繁栄 言へば胸をどれど 省みて 悔いの深さよ 甦る日本の空青き日に あ、朝づたふ 大倭の鈴鐸 をのこ子も おみな子も 出で、聴け。東京の 大神の 朗らなる大御聲」とあるこの詩の内容に、折口にとつての、神武天皇以来の「天皇像」が凝縮されていると指摘。

こうした天皇のあり方と、神武天皇とが重なって、折口は神武創業にこだわったのではないかと述べた。その上で、折口が国学を語る際に幾度も引用した、国学者矢野玄道の歌である「檀原の御代に還ると思ひしは あらぬ夢にてありけるものを」に言及。折口の明治天皇に對する思いと、神武創業に對する思いとを指摘した上で、「先生は檀原の御代になる前までの道を突きとめたかった」と述べた。

最後に、折口の人的ネットワークを見ていくことの重要性を指摘。その上で、当時の国学、国文学と民俗学、これらの考え方の相違があつたことも含めて、単に國學院、慶應義塾の話ではなく、全体をトータルに考え研究していくことで、新たな折口信夫像が見えてくるのではないかと結んだ。

(文責・宮本誉士)

日本文化研究所

ワークショップ「生活の中で直面する世界の宗教文化

—食・服装・忌避などへの理解—

令和元年六月二十九日(土)、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と宗教文化教育推進センターの主催で「生活の中で直面する世界の宗教文化——食・服装・忌避などへの理解」というワークショップを開催した。

現代の日本社会で生活する際に、国籍を問わず、様々な宗教文化を背景に持つ人々と関わることは、もはや不可避であるが、その多様性が、現実問題としてどのような違いとして現れ、またそこでどのような対応が行われているのかといったことについて、実際の事例に基づいて議論し、理解を深めたというのが開催の趣旨である。

登壇者として、岩元陽子氏(NPO法人M.I.C.かながわ、英語通訳・派遣コーディネーター)、カーン恵理子氏(合同会社Cosshirts代表、食のバリアフリー推進協議会代表)をお招きし、それぞれのご活動に即して、実践的な局面に焦点を合わせたご報告をお願いした。お二方のご報告を受けて、指定討論者の井上順孝氏(本学名誉教授、日本文化研究所客員教授)、矢野秀武氏(駒澤大学教授)、板井正斉氏(皇學館大学准教授)からコメントを頂き、更に会場からの質問を受ける形で質疑応答の時間を取った。司会は平藤喜久子氏(本学教授、日本文化研究所所長)が務めた。

まず岩元氏より、「医療現場における宗教文化への対応—医療通訳者の視点から—」という題の報告が行われた。岩元氏は、神奈川県で行政と民間の共同事業として行われている「かながわ医療通訳派遣システム」に、医療通訳コーディネーターとして関わっている。

医療通訳者は、医療従事者と外国人患者との間に入り、両者の意思疎通を円滑に進めることに従事する。医学的な事柄を通訳することは前提として、その際に文化間の違いを踏まえて翻訳して伝える必要があり、そこで宗教文化の違いが問題になることがあるという。

実践的な問題として、例えばムスリマ(女性イスラム教徒)の患者に対する医療行為において、どこまで男性医師がこれを行うことができるかといったことなどが挙げられたが、いずれに

しても一律に答えがあるような問題ではないため、常に両者の間に立って「落としどころ」を探る努力が必要とされているとまとめられた。

続いてカーン氏より、「ムスリムとして日本に暮らすこと。その課題。」という題の報告が行われた。カーン氏は、ムスリム(イスラム教徒)への対応を専門とする会社の代表として、様々な事例にアドバイザリ的な立場で関わったりしてこられている。

カーン氏は、日本でムスリムとして暮らす場合に、冠婚葬祭や学校教育などにおいて、当事者の視点から見てどのようなことが問題となり得るのかを具体例を挙げながら概観し、ムスリムにとっては食べ物だけではなく、生活の全ての局面においてイスラム的に「正しい」(ハラル)あり方を目指すべきことが前提となっており、この前提が広く一般に知られ、共有されていくことが望ましいとした。

具体的な対応について、ムスリムにとって禁忌とされる(ハラム)食すべてはいけなものについて知識があることが望ましく、またわからない場合には直接相手に確認するという基本

姿勢が重要であるとされた。

更に、比較的容易に対応可能な実践として、提供している食べ物の原材料について、ピクトグラム(絵文字)を用いて表示するというやり方が紹介された。これは単にムスリム対応ということだけではなく、食物アレルギーやベジタリアンへの対応などを含めて、正確な情報を開示した上で、消費者に主体的に選択してもらおうことにつながるものであると述べられた。

これを受けて、指定討論者三名からコメントがあり、その後、会場の参加者を含めて活発な質疑応答が行われた。日本人ムスリマの方からの当事者としての発言や、この問題に関心を持っている学生からの質問などもあり、有益な議論がなされた。全体を通して、宗教文化教育の重要性と有用性が再確認された。

(文責・星野靖二)



岩元陽子氏



カーン恵理子氏



質疑応答の様子

日本文化研究所 「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」

平成三十一年度から始動した日本文化研究所の研究事業、「国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築」は、「近世・近代国学に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築」、「国学・神道関係人物データベースの拡充」、「国学研究のネットワークの拡張」を三つの中心的な柱としている。そのうち第三の「国学研究のネットワークの拡張」の一環として、平成三十一年度から「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」という新たな取り組みを開始した。

これは学内外から国学とその隣接領域に関する研究を行っている第一線の



荻原稔氏

研究者を招き、それぞれの専門分野の見地から、国学をめぐる研究史や最新の研究について講演を行ってもらうという催しである。このような講演を通じて得られた知見を、本研究事業のもう一つの柱である「近世・近代国学に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築」に反映させることがこの公開レクチャーの趣旨である。

さらにこうした講演を一般に向けて公開することで、最新の学術的研究成果を社会に還元していくことも企図している。

令和元年度(平成三十一年度)は、第一回を十一月十四日(木)に開催し、講師の荻原稔氏(国際日本文化研究センター)により、「井上正鐵門中・禊教と国学」をテーマとする講演が行われた。

荻原氏は『井上正鐵門中・禊教の成立と展開——慎食・調息・信心の教え』(思想の科学社)などの著作があり、井上正鐵門中・禊教研究の第一人者として知られる研究者である。講演ではまず井上正鐵門中の行法と教説の概略が説明され、様々な系統の行法の実演も行われた。

続いて荻原氏は井上正鐵と国学の接点として平田篤胤の著作である『神祇伯家学則』の例を取り上げた。同書は著述差し止めの命を受けていた最晩年

の篤胤が、白川資延王の口述筆記という体裁により著わした偽書である。その成立背景には井上正鐵の新義異流一件が起こった際、寺社奉行の下問への「上言書」とするべく白川家関東執役の依頼を受けたという経緯があった。このような『神祇伯家学則』の成立過程を通して荻原氏は国学との関係について論じていき、今後の研究の展望についても語った。

荻原氏の講演を受けて活発な質疑応答も交わされ、令和元年度第一回公開レクチャーは盛況のうちに終わった。本年度はさらに第二回と第三回の公開レクチャーを、それぞれ高野奈未氏(日本大学)、伊藤聡氏(茨城大学)を講師として開催した。

なお、平成三十一年度は五名の講師(及び二名のコメンテーター)によるレクチャーが行われた。各回の概要は次の通りである。

第一回の公開レクチャーは平成三十年九月二十一日(金)に開催された。日本文学の領域において国学研究を行ってきた一戸涉氏(慶應義塾大学)が講師を務め、「国学と復古——光格天皇以後——」とのテーマにより、近世後期の「復古」の潮流と国学との関係について講演が行われた。

第二回の公開レクチャーは平成三十一年一月二十五日(金)に開催された。国学者の政治思想の研究を精力的に行ってきた三ツ松誠氏(佐賀大学)を招き、「国学政治思想史研究の現在」とのテーマにより講演が行われた。丸山眞男以降の国学政治思想史研究の展開を概観しつつ、今後の研究の

可能性を展望する内容となった。

第三回は平成三十一年二月二十七日(水)に開催した。この回のみは垂加神道と国学の関係という共通テーマを設定し、二名の講師による講演が行われた。一人は近世・近代の日本宗教史研究で知られ、近年『洪川春海——失われた暦を求めて』(山川出版社)を上梓した林淳氏(愛知学院大学)である。「洪川春海の垂加神道・吉川神道への批判と国学者への影響」とのテーマにより、貞享改暦で知られる春海の復古主義や、その暦研究が国学者に与えた影響について講演が行われた。

もう一人の講師である齋藤公太(國學院大學)は、「垂加神道と国学——その関係をめぐる研究史——」というテーマのもと、垂加神道と国学の関係をめぐる研究史を概観した。

第四回は平成三十一年三月四日(月)に開催された。講師の小田真裕氏(船橋市郷土資料館)は「国学研究への入り口——生涯学習の観点から——」というテーマのもと、勤務先での経験に基づき一般の人々が国学研究に触れる可能性について講演を行った。この回では小林威朗氏(國學院大學)、芹口真結子氏(一橋大学)がコメンテーターとなり、それぞれの職務上の経験から小田氏のレクチャーに対してコメントを行った。

平成三十一年度に行われた各講演の講師による要旨は、『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』第十二号に掲載されている。そちらもあわせて参照されたい。

(文責・齋藤公太)

古事記学センター

「古事記学」の推進拠点形成

「古事記」の先端的な研究・教育・発信」事業報告

事業の目的と概要

本事業は、本学が平成二十五年度から継続して推進してきた古事記学事業を基盤とし、平成二十八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に選定された「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的な研究・教育・発信―を推進するものである。

事業目的としては、本学において創立以来、継続して行われてきた「古事記」を中心とする「古典」研究を継承・発展させ、日本文化の新たな創造と発展に寄与することにある。

令和元年度の事業報告

本年度の全体目標は以下の通り。
・中間評価に基づく『古事記』研究の深化と教育システムの構築。
〈研究〉国際的な比較研究の推進
〈教育〉教育実践の本格的開始。
〈発信〉博物館連携による『古事記』関連展示の実施。

これらの目標に対して、以下の個別事業計画を推進した(以下敬称略)。

①学内定例研究会の実施

定例研究会は、AMC棟五階会議室〇六を会場として六回(十六時〜十七時三十分)開催した。研究会は、『古事記』の本文校訂・註釈の検討、本学の教員・研究員等による発表・報告で構成される。

―世界と次世代に語り継ぐ

「古事記」の先端的な研究・教育・発信」事業報告

○第一回(令和元年五月二十九日(水))
「データベース進捗状況について」(井上隼人・中山陽介)

○第二回(令和元年六月十九日(水))
古事記の本文校訂(27・28)「根之堅州国訪問①・②」(谷口雅博)

○第三回(令和元年七月二十四日(水))
古事記の本文校訂(29)「八千矛の神①」(谷口雅博)

○第四回(令和元年十月十六日(水))
古事記の本文校訂(30)「八千矛の神②」(谷口雅博)

○第五回(令和元年十一月二十日(水))
「阿須波神と興玉神について」(藤本頼生)

・古事記の本文校訂(31)「八千矛の神③」(谷口雅博)

○第六回(令和元年十二月四日(水))
「八千矛神神話の考察―「鎮座」を中心にして―」(鶉橋辰成)

・古事記の本文校訂(32)「八千矛の神④」(谷口雅博)

○令和元年度国際ワークショップ・国際シンポジウム「いにしへの「心」を伝える」の開催

令和元年度は国際ワークショップ・国際シンポジウムを統一したテーマのもと開催し、芸能、教育という二つの観点から古典と現代をつなぐ方法について講演・討論を行った。以下それぞれの日程と登壇者を掲げる。

○国際ワークショップ「世界と次世代に伝える日本の伝統文化」(令和元年十月十八日(金)、十四時三十分〜十六時、常磐松ホール)、【登壇者】十代目松本幸四郎(歌舞伎役者)、カミングス・アラン(ロンドン大学SOAS)、平藤喜久子。

○国際シンポジウム「神話・伝承の教化と実践―『子ども古事記』がひらく世界―」(日本文化興隆財団後援、令和元年十月二十六日(土)、十三時〜十七時三十分、常磐松ホール)、【パネリスト】吉永安里、原田留美(東京都立大学)、シャロンドン・エミリア(元関西学院大学)、岩瀬由佳、【討議司会】成田信子、【総合司会】松本久史、【日本神話イザナミ語り】小山茉美(声優・ナレーター)、青葉雅楽会(本学雅楽サークル)。

○国際ワークショップ「近現代日本の宗教文化と「古代」の開催
令和元年十月三十一日(木)、米国立コロンビア大学を訪問して研究交流を図った後、翌十一月一日(金)、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所にて、同研究所と本センター、日本文化研究所共催のもと国際ワークショップを開催した。詳細については6頁を参照のこと。

○第三回古事記アートコンテスト
古事記アートコンテストは、『古事記』および日本文化への関心を促すためのもので、本年度で第三回となり、大学生部門一三七点、高校生部門二五七点の作品が寄せられた。令和元年十二月二十二日(日)に審査会を行い、谷口雅博、武田秀章、藤澤紫、松

山文彦(一般財団法人神道文化会専務理事・東京大神宮宮司)、中野リョーコ(フリーデザイナー・イラストレーター)、杉野庸介(株式会社一迅社取締役・「コミックZERO-SUM」元編集長)を審査員として、各部門で特選一名、入選二名、佳作三名、審査員特別賞一名が選ばれた。団体賞としては宮崎日本大学高等学校が選出された。授賞式は令和二年二月九日(日)に開催した。

○第一回南開大学―國學院大學国際協働シンポジウムの開催
昨年本学研究開発推進機構と南開大学外国語学院との間で締結された研究協定に基づき、令和元年十二月十五日(日)、中国・南開大学において第一回国際協働シンポジウムが開催された。詳細は7頁を参照のこと。

○国際研究フォーラム「二十一世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」の開催
国学研究の国際交流活発化を目指し、日本文化研究所主催、古事記学センター共催で令和二年二月八日(土)、常磐松ホールにて国際研究フォーラムを開催した。国内外から七名の研究者を招き、本学からは松本久史が登壇し、遠藤潤が司会を務めた。

(文責・渡邊卓)



審査会の様子

古事記学センター

国際ワークショップ「近現代日本の宗教文化と「古代」

令和元年十一月一日(土)、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所と國學院大學研究開発推進機構古事記学センター、同日本文化研究所共催のワークショップ「近現代日本の宗教文化と「古代」」が開催された。本企画は、ハーバード大学のヘレン・ハーデカ教授の多大なご助力のもとに実現したものである。

ワークショップでは、近代日本人はどのような古代を想像し、どのような古代イメージを創造していったのだろうかという問題意識のもと、ハーデカ教授の司会により、次のような発表が行われた(発表順)。

①平藤喜久子「神の姿にみる古代と現代」、②遠藤潤「平田国学における古代の神のリアリティ―近代に向かつて―」、③星野靖二「日本宗教史の叙述と「古代」―宗教学の展開との関連において―」、④齊藤智朗「造化三神をめぐる神学の構造と展開」

各発表について、ライシャワー日本研究所では、次のディスカッサントの先生方を招聘して下さった。

Prof. Jolyon THOMAS(University of Pennsylvania) Prof. Anne WALTHALL(University of California, Irvine) Prof. Kaoru HAYASHI(Texas State University) Prof. Trent MAXEY(Amherst College)

以下、各発表の内容を述べる。平藤

は、現代のマンガやゲームなどポップカルチャーのなかで描かれる神の姿について、神道的な要素や「和」の要素はみられるが、古代性は意識されず、現代的な装いも珍しくないと指摘した。そこから時代をさかのぼり、紀元二千六百年を記念して作られた「肇国創業絵巻」を手がかりに近代の状況を分析した。この絵巻では考古遺物が参照されて神話が描かれた。このように古墳時代風な神々の装いが近代に特有であったことを江戸期の浮世絵と比較しながら論じた。結びでは、こうした自由な神表現の背景に日本人の神への距離感があるのではないかと考え、この意識で他文化の神も表象することの危険性を指摘した。

遠藤は、平田篤胤が神や神代をいかにリアルだと考えたかを検討するには、さまざまな側面での「つながり」の感覚に注目することが重要であることを提示した。そして、コスモロジー・世界生成、歴史意識と「古史」神・霊の顕現と憑依の各側面から篤胤の思想において古代のリアリティがいかに確保されていたのか考察した。その上で篤胤没後に気吹舎が現実の政治状況に深く関わるようになった時期にも、神・霊や異界をリアルと感じる感覚は後継者たちの間に存続していたこ



とを述べた。また、明治初年の国民教化に平田国学が深く関わるなかでのリアリティのゆくえについては黄泉国論を紹介し、同時代の欧米人の視点として、日本アジア協会とアーネスト・サトウについて触れた。

齊藤は造化三神に関する神学がもつ、近代日本の宗教文化における特色について考察した。造化三神をめぐるのは、明治維新後に、平田篤胤の国学をもとに古典の記述を宗教的に読み替えて、神道の世界観の中心に据えた神学が構築された。しかし、祭神論争の終結と神官教導職分離により、造化三神を中心とした世界観に基づく神学が公的に否定され、天照大神への祭祀のみを中心とする「神社非宗教」に基づく国家神道成立の基盤が形成された一方、造化三神は「宗教」である教派神道の多くで奉斎された。こうした近代

における神道の構造は、天照大神を中心とする「非宗教」としての国家神道と、造化三神を主に奉斎する「宗教」としての教派神道という、二極的なながらも神学の上では「競合」と「補充」の両面を有した構造になるとし、近代における造化三神が「非宗教」とされた国家神道時代において、神道の「宗教性」の象徴として位置づけられた点に特色があると論じた。

星野は、近代日本の宗教学者が、どう古代と向き合ったのかという問題を取り上げた。明治初期から啓蒙主義的な宗教理解が流入し、これにスペンサー流の社会進化論が結びつくことによって、進化的に宗教を捉える図式は、宗教を批判するものだけでなく、宗教者にも広く共有されることになる。そこで「古代」からの伝統や歴史は学問的な検討の対象となり、一八九〇年代には聖書の高等批評や大乘非仏説論が、それぞれキリスト教界と仏教界に大きな影響を与えることになった。そのなかで姉崎正治の日本宗教史は、時に実証的な歴史記述とは異なる面を見せ、「古代」についても規範的な価値が投影されることになると指摘した。その一つの手がかりとして、姉崎が英語で提示した日本宗教史と日本語版のそれとの差異について検討しながら、姉崎の「古代」観とその研究方法をあらためて検討した。

ワークショップではアメリカ各地から参加した研究者や大学院生との間で、近世から近現代の神道をめぐって活発な議論が交わされた。

(文責・平藤喜久子)

南開大学外国語学院との学術連携について

経緯・目的

國學院大學と南開大学(中国・天津)は、平成九年に教育・学術交流協定(一般協定)を締結し、それに基づいて平成二十七年には南開大学外国語学院と本学大学院文学研究科の間で、研究教育に関する協定を結び、教員間の交流や学部生・大学院生の連携強化、フォーラムへの協力などが実施された。

かかる実績を踏まえ、平成三十年には、南開大学外国語学院と本学研究開発推進機構との間で、さらなる学術研究の国際交流、相互の友好を深め学術の進展を目的とする学術交流協定が新たに結ばれた。

本協定の締結のため、平成三十年五月十三日(日)～十四日(月)にかけて、古事記学センターの渡邊卓助教(肩書は当時)が南開大学を訪れ、本機構との研究連携について協議を行い、同大学外国語学院日本語文学科の院生研究会に参加して、大学院生の日本研



平成30年の講演会の様子

究関連の発表に対し質問やコメントを行った。また、同大学東アジア文化研究センター主催の講演会にて「『古事記』の說話―神祇と神語―」を講演し、学術交流を深めた。

そして平成三十年十一月六日(火)、研究開発推進機構と南開大学外国語学院の間で学術交流に関する協定締結のための調印式が行われ、根岸茂夫研究開発推進機構長(当時)と王凱南開大学外国語学院副院長らが出席した。

研究開発推進機構国際交流研究会

右の協定に基づいて、令和元年八月一日(木)～十八日(日)にかけて王凱氏が研究交流のために来日し、本機構に滞在されることとなった。

それに伴い、本機構では、八月一日に国際交流研究会(十四時～十七時



針本正行学長を表敬訪問する
王凱副院長

三十分、於A.M.C棟五階会議室(〇六)を開催し、学術交流を行った。なお、研究会の発表者・タイトル等は以下の通りである。

- ・王凱(南開大学外国語学院副院長)「中国における日本研究の動向―令和元年を中心に―」
- ・高橋俊之(古事記学センターPD研究員)「仁徳記における儒教的天皇像と古代中国天子像」
- ・塩川哲朗(学術資料センターPD研究員)「資料から見た大嘗祭―学術資料センターの研究事業から―」
- ・吉永博彰(本機構助教)「國學院大學における日本文化研究の事例」

第一回国際協働シンポジウム

次いで、令和元年の十二月十五日(日)、協定に基づき、南開大学と本学との協力による第一回国際協働シンポジウム(十時～十七時四十分、於外国語学院一三九会議室)が開催された。

本シンポジウムでは、日中の研究者九名が集い、元号、讓位、天皇、大嘗祭などをテーマとして意見交換を行った。本機構からは根岸茂夫(本学教授)、岩瀬由佳(本学教授)、渡邊卓(本機構准教授)が参加して発表を行い、活発な議論が交わされ、計六時間に及ぶシンポジウムとなった。参加者と

発表タイトルについては、以下の通りである。

- 〈第一部〉韓立紅(コーディネーター・南開大学)
 - ・岩瀬由佳「映画『ブレードランナー』における動物の表象」
 - ・劉雨珍(南開大学)「年号『令和』と『万葉集』」
 - ・王凱(南開大学)「古代日本の女帝―権力と権威の模索―」
- 〈第二部〉根岸茂夫(コーディネーター)
 - ・渡邊卓「トヨノアカリからウタゲへ」
 - ・于君(南開大学)「『太平記』中の後醍醐天皇像」
 - ・根岸茂夫「十七世紀の東アジアと大嘗会の再興」
- 〈第三部〉岩瀬由佳(コーディネーター)
 - ・孫雪梅(南開大学)「近代日本の不敬罪と天皇制」
 - ・王新新(南開大学)「戦後文学に見る天皇制禁忌」
 - ・韓立紅(南開大学)「日本語学科の学生の実践報告から見た中国大学生の天皇認識」



シンポジウム後の記念撮影の様子

今後も双方の教員・研究者の相互交流を行い、研究上の情報及び資料の交換といった学術交流を実質化すべく連携を行っていく。

(文責・渡邊卓)

研究開発推進センター

神社との連携事業について

霧島神宮、北海道神宮、乃木神社の研究

本学の「建学の精神」に基づく神道・国学、日本文化の研究を推進する研究開発推進センターは、院友神職会からの指定寄付金による研究事業を継続的に実施するとともに（近代の神道及び神職・国学者に関する研究）等）、神社との連携事業を推進している。本年度は、霧島神宮、北海道神宮、乃木神社からの指定寄付金に基づく研究事業をそれぞれ進めており、その経緯と成果について概略ながら紹介することとした。

霧島神宮の研究

「霧島神宮の研究」は、鹿児島県霧島市に鎮座する霧島神宮からの御依頼に基づき、平成二十八年度から資料調査を進め、阪本是丸研究開発推進センター長の監修、研究開発推進センターのマネジメントによる『霧島神宮誌』編纂事業の推進を目的に実施したものである。

具体的には、霧島神宮、鹿児島県立図書館等の所蔵資料閲覧のための出張調査を継続的に実施するとともに、霧島神宮誌編纂委員会（阪本是丸委員長）を組織し、全体会議において作業工程や編纂方針、各委員の意見調整等を行いながら、編纂事業を進めた。委員には、本センター専任教員の他、田村省三氏（尚古集成館）、吉田扶希子氏（西南学院大学）等の研究者が名を連ね、事務局は霧

島神宮に置かれた。また、全体会議の方針に基づき、本センターと霧島神宮の担当者会議において、個別案件の意見調整等を随時行いながら、それぞれの執筆・編集作業を進め、平成三十一年四月には全ての原稿を入稿した。



第3回霧島神宮誌編纂委員会全体会議（平成30年7月3日）

そして、足掛け四年にわたる編纂事業の成果として、今般、霧島神宮誌編纂委員会編『霧島神宮誌』（霧島神宮、令和元年九月）を、当初の予定通り刊行した。なお、同書の構成は、第一部に霧島神宮の創祀から現代に至るまでの歴史、第二部に祭祀・社殿・文化財・宝物・境内地・崇敬団体等の現状をまとめることとして、第一部の執筆は編纂委員、第

二部は主として事務局（霧島神宮職員）が担当した。



『霧島神宮誌』（令和元年9月）

北海道神宮の研究

北海道札幌市に鎮座する北海道神宮からの御依頼に基づき、平成二十九年度から実施した研究事業「北海道神宮の研究」は、平成三十一年度（令和元年度）の北海道神宮御鎮斎百五十年及び第四百四十回札幌まつりを記念して出版する書籍の編纂を行うことを目的として推進したものである。

本センターにおいては、すでに北海道神宮に係る研究事業の成果として、北海道神宮・國學院大學研究開発推進センター編『北海道神宮研究論叢』（弘文堂、平成二十六年）を刊行しており、今回の研究事業はこれらの研究成果を踏まえながら、北海道神宮と「札幌まつり」の歴史を史的に捉えることを目的として、新たに出張調査を行い、推進するものと位置づけた。

そして今般、これまでの調査・研究の成果として、御鎮斎百五十年式年祭当日の令和元年九月一日、北海道神宮社務所編・國學院大學研究開発推進センター編集協力『北海道神宮と札幌まつりの歴史』（北海道神

宮、令和元年九月）を刊行した。



『北海道神宮と札幌まつりの歴史』（令和元年9月）

乃木神社の研究

「乃木神社の研究」は、東京都港区に鎮座する乃木神社からの御依頼に基づき、令和元年度から三年度までの三年間、調査・研究を実施し、令和五年の御鎮座百年を記念して出版する『乃木神社御鎮座之記―戦災復興に至るまで―（仮）』を編纂することを目的とする。

乃木神社の神社誌作成は今回が初めてのこととなるため、神社所蔵資料の把握・整理から着手して、資料の分析検討を進めている。これらの資料に基づき、乃木大将の殉死から乃木神社創建に至る経緯、その後の発展と戦災からの復興に至るまでを目的として、神社誌を編纂する予定である。

現在調査を進めている資料からは、神社創建に係る様々な活動を進めた中央乃木会の動向、募財、造営工事、鎮座祭に至る道筋等を確認することができ。今後は、神社の創建以降、戦災復興に至るまでの乃木神社の歩みを明らかにすることを目的として、引き続き資料調査を進めることとした。

（文責・宮本誉士）

國學院大學博物館

企画展「浮世絵ガールズ・コレクション」

「江戸の美少女・明治のおきちゃん」

■開催に至る経緯

國學院大學博物館は、平成二十八年度に新たに浮世絵コレクションを取藏した。本コレクションは、江戸後期から明治期にかけて出版された色鮮やかな錦絵(多色摺の浮世絵版画)が中心となっており、その大部分は画帖(アルバム)形式で保存されていた。そのため、本展示に先駆けて、まずはその一部を修復し、本来の一枚絵に戻すことが行われた。本コレクションには様々な主題の作品が含まれているが、その中でも人気の役者やおしゃれな美人など「うつくしいひと」を描いた作品が多いのが特徴である。全体を通じて、近世後期から明治、大正期にかけて移ろう暮らしや娯楽、装い、信仰など、時代の変化を視覚的にも通覧することができ資料である。ほかにも、七五〇点を数える千社札や、八〇〇点を超えるぼち袋など、伝統木版画の小品も加えると、三、〇〇〇点を超す膨大なコレクションである。

■開催概要

本展示は、新取藏した浮世絵コレクションの初公開として企画された。会期は六月二十九日(土)〜八月二十五日(日)。記念すべき第一回目の展示は、浮世絵の華と称される「美人画」を切り口として、江戸

から明治にかけて描かれた優品を公開。幕末浮世絵界の人気絵師・歌川

国芳、明治の美人画界を代表する月岡芳年らの著名なシリーズを通じて、変容する美人画の系譜を示すと共に、美女と共に画中に描かれる風景や装いなどにも注目。江戸から明治の風俗や文化、さらには移り行く時代を生きる女性たちの心の中にもふれる。また、浮世絵の世界を身近に感じられるよう、鏡や合巻本など本学所蔵の史資料も展示。「意気」を専らとした江戸の女性と、元気で「おきちゃん」な明治の娘。「江戸」と「明治」という2つの時代の美人表現をテーマに約四〇〇点を紹介した。

■展示概要

第1章 3つのキーワードで知る！浮世絵 約三五〇年前に江戸で誕生し、庶民の一大メディアとなった浮世絵。その魅力を、三つのキーワード(江戸絵・錦絵・うきよの絵)で解説。

浮世絵は新興都市・江戸で育まれ、土産物として諸国に広がった。江戸時代中頃の明和期に、フルカラー印刷の先駆けとなる「錦絵」が登場。やがて19世紀後半には海外にも大量に輸出された。

「錦絵の技法と出版工程」、「浮世絵の読みかた」、「美人画のよみ方」

第2章 江戸の美少女 浮世絵が

大量に出版された江戸後期に描かれた魅力的な女性の数々を紹介。

浮世絵には、主に江戸市中に暮らす様々な階層、年齢、職種の女性が登場する。贅沢な衣装を着た武家や裕福な商家のお嬢様、パワフルに働く女性たち。また従来は脇役であった既婚女性や母親も、喜多川歌麿らによって、18世紀末頃から「主役」に拔擢される。江戸後期の浮世絵界を先導した歌川派は、とりわけ様々な種の美人画を提供した。この時期の浮世絵には明るくきつぷの良い女性が多く登場するのも特徴である。

「よくばりな美人画」、「伝説の美女」

第3章 明治のおきちゃん 文明開化を機に変化する社会の中での、時代性を映した美人画を紹介。

約二五〇年続いた江戸時代から明治に移行し、女性たちの暮らしにも大きな変化が訪れる。恋愛、結婚、その他、「文明開化」の名のもとに環境が刷新されるが、なかでも職業の選択肢が徐々に広がったことは大きな出来事であった。変化の波は、装いや化粧にも及び、「お歯黒」や「眉剃り」などが度重なる禁止令と共に淘汰され、次いで鹿鳴館落成を機に、上層階級の男女が洋装で集う機会も増えた。新制度の学校教育を受ける夢多き少女や子どもの風俗も描かれ、浮世絵の主題に活力を与える。時代の変化により鮮やかに移ろう「心」の動きをキャッチしながら、絵師は女性の憧れを具体的に表現し続けた。

「文明開化と少女」、「少女たちの夢と憧れ」、「コラム」海を渡った浮世絵」

■関連事業

本展示の関連事業として、ミュージアムトーク、講演会及びワークショップを行った。

・ミュージアムトーク「浮世絵、B I J I N くらべ」日時・七月二十日(土) 講師・藤澤紫(本学教授)

・講演会「女性美と粋——江戸・明治の美人に学ぶ」日時・七月二十七日(土) 講師・岩下尚史(本学客員教授・作家)、藤澤紫・ワークショップ「浮世絵ぬりえ& デザイン?」日時・八月五日(月) 講師・藤澤紫、佐々木理良(國學院大學博物館学芸員)

■刊行物

展示図録『浮世絵ガールズ・コレクション——江戸の美少女・明治のおきちゃん』全五十四頁、B五版。

本展の総来館者数は一六、九九三名。一日あたり約三六二名の来館者数であった。加えて、今までにない若年層の割合も多く、新たな来館者層の獲得にもつながる展示であった。今後の本コレクション公開への期待の声も多く、次年度以降の計画にも反映していきたい。

(文責・國學院大學博物館)

國學院大學博物館 企画展「和歌万華鏡 — 万葉集から折口信夫まで —」

開催趣旨

日本文化において歌の果たした役割は大きい。そのため、日本文化の考究を目的とする本学では、多くの歌書を蒐集・所蔵すると共に、歌の研究を行なってきた。また、釈道空(折口信夫)などの実作と研究を併せ行なった人物を多く輩出したことは、本学の学校史において重要である。

本展示は、本学が持つ研究面と実作面との成果を紹介すると共に、そのおもしろみとある歌が詠われ、書写される意味・効果を解説し、和歌の多様な魅力を再認識してもらうことで、学術資産研究および自校史研究の成果を広く社会に還元することを目的とした。来場者は一、三八九名を数えた。

会期

平成三十一年四月二十七日(土)

令和元年六月二十三日(日)

(五月一日)〜六日休館 五月二十七日

メンテナンス休館)

【前期】四月二十七日(土)

五月二十六日(日)

【後期】五月二十八日(火)

六月二十三日(日)

前期・後期で大規模な展示替えをし、それぞれの会期中にも一度ずつ展示箇所を替えた。

主な展示品(期間中は計58点を展示)
・『万葉集』元暦校本断簡

(平安時代後期)
元暦校本は平安時代後期書写で現存する『万葉集』の一つ。筆蹟の価値はもちろん、飛雲という平安時代特有の料紙装飾の技法も注目される。
・『金葉和歌集』二度本

伝藤原為家筆(鎌倉時代中期)
『金葉和歌集』二度本のうち、現存最古の完本と言われる。勅物も重要で、そこには六条藤家の学説の反映されている可能性が指摘されている。
・『新古今和歌集』伝源親行筆

(鎌倉時代)
一二〇五年に完成の宴が開かれた『新古今和歌集』から半世紀と経たずに、源親行が一二三三年に校合して書写した系統の本。親行筆と伝わるが、おそらくは同時代13世紀の写し。
・『古今集遠鏡』本居宣長自筆

(江戸時代中期)
『古今和歌集』はじめての口語訳。
・『学問の道』折口信夫詠

中島壤治筆(昭和五十八年)
昭和十八年十月十四日の「軍神祭ならびに壮行会」で折口信夫教授が学徒出陣する学生に贈った長歌ならびに反歌。本書は、その四十年後に行なわれた「戦没院友・学徒慰霊祭」の際に中島壤治教授(号・司有)が戦場に散つ

た学友を偲んで揮毫した。

展示構成

【序章】詠む

和歌を詠むとはどういう行為なのか、その意味を『古今和歌集』仮名序や国学者の言説を取り上げ、紹介した。

【第1章】規範―奈良・平安―

和歌史においては、『万葉集』と勅撰和歌集、特に『古今和歌集』が重視された。『万葉集』は現存最古の歌集であり、勅撰和歌集は天皇が下命して編纂された歌集だからである。本章では、本学図書館所蔵の『万葉集』および勅撰和歌集のうち「三代集」と言われる『古今集』『後撰集』『拾遺集』を中心に紹介した。

【第2章】権威―平安・鎌倉・室町―

勅撰和歌集は、のちの時代になると権威の象徴となる。特に『古今和歌集』は正典とされ、それを規範として和歌が詠まれることとなる。『新古今和歌集』の命名は、まさにそれを象徴するものであった。本章では、「三代集」以降の勅撰和歌集、特に『新古今集』を中心に紹介した。

【第3章】装飾―平安〜江戸―

和歌が装飾される例は、平安時代から確認できる。室町末期から江戸時代前期には、それを規範として書写・制作された歌集も認められる。本章では、それら美麗な歌集を中心に紹介した。

【終章】学ぶ

和歌は、国学・新国学にお

いても研究された。その研究と、その研究に従事した人物たちの和歌を紹介した。

関連事業

講演会 於常磐松ホール

辰巳正明「折口信夫から万葉集へ 漂泊の詩人の魂」

五月十一日(土) 十四時〜十五時

・ミュージアムトーク

於國學院大學博物館ホール

①荒木優也「歌書のみかた」

五月二十五日(土) 十四時

②荒木優也「恋歌をよむ」

六月一日(土) 十四時

③渡邊卓「人の心を種として」

六月十五日(土) 十四時

〜十四時四十五分

展示図録

全十五頁。渡邊卓・高野裕基・荒木優也執筆。佐々木理良デザイン案。

(文責・渡邊卓)



和歌万華鏡

國學院大學博物館

特集展示「王権と古墳―倭国統合の象徴―」

この特集展示は、令和元(二〇一九)年七月に、大阪府の「百舌鳥・古市古墳群」が世界文化遺産に登録されたことを記念して、「日本」という国家の原型が形成された古墳時代と、古墳そのものに対する理解を深めるため、同年九月十四日(土)から十月二十七日(日)まで開催したものである。全二十八頁の図録は、三〇〇円にて販売中。以下、展示の趣旨と各章概要を示しておく。

展示の趣旨

わたしたちが古墳時代と呼んでいる3世紀から6世紀には、九州から東北部にかけての広範な社会統合が起り、後に「日本」と名乗ることになる国家の原型が形成された。つまり、多様な倭人集団が個々の独立を諦め、神々と祖霊に対する祭祀の様式を共有することで、相互の抗争を回避することになったのである。このような社会では、古墳の墳形と規模の差別によって亡き首長や、彼/彼女の属する集団の立場が表示されたという。

しかし、当時の人々にとって、そもそも「古墳」とは如何なる存在であったのだろうか。この展示では、単なる墓ではない巨大人工物―古墳―の姿を点検しながら、古墳の始まりと終わりや、葬祭と神祭との関わりに注目し、かかる疑問を紐解いていく糸口の幾つかを示した。

I 古墳を生み出した社会

―戦争の否定、権力の肯定

弥生時代中期以降の北部九州地方では、有力首長らの墳墓に銅鏡や武器形青銅器などを副葬する例が現れ、徐々に社会の階層化が顕著になってゆく。片や、西日本地方から中部地方では、地域集団による武器形青銅器や銅鐸の埋納が行われていた。弥生時代の後期になると、各地で特色のある墳丘墓が営まはじめる。このような墳墓の様性は、地域集団の独自性や排他性を示す考古学的痕跡と言えよう。

一方、『後漢書』や『三国志』によれば、二世紀末まで「百余国」が分立していた倭では、「神鬼道」に長けた卑弥呼や、その一族の少女である壹与を女王―首長かつ司祭―に共立することで抗争を収束させたという。これは、倭人が地域集団の独立を諦め、国家の発生を受け入れたことを意味する。なお、「年已長大、無夫婿」とされた卑弥呼が、所属親族集団からの婚出を許されていなかったとすれば、既に倭王を輩出する王親の範囲が限定されていた可能性も否定できない。

II 古墳というモニュメント

―周縁としての中心

後の令制「大和国」に相当する地域は、弥生時代における西方世界の東端、かつ東方世界の西端に位置する。

しかも、初期の倭王権が中枢を構えたとみられる奈良盆地東南部には、纏向遺跡に先行する大規模遺跡の存在が認められない。この地で三世紀に誕生した「前方後円墳」は、それから六世紀まで造営が続けられた有力首長たちの墳墓―古墳―の代表的存在である。

かかる古墳の不思議な姿は、各地の弥生墳丘墓にみられた諸属性を、キメラ的に統合して生み出された経緯を示すものである。例えば、北部九州地方からはじまった鏡・武器の副葬、瀬戸内・畿内地方に特徴的な墳丘形態、山陰地方で顕著にみられた葺石、そして山陽地方に由来する埴輪などは、新たな「中心」となった「ヤマト」の「周縁」性を如実に物語っている。かくして、地域集団の連合体である倭王権下の社会構造は、古墳というモニュメントが築造されるたびに更新を繰り返していったのだ。

III 古墳と神社

―王権と自然の霊威

古墳には、被葬者個人の佩用品とは考えられないほど莫大な財が副葬される場合もあった。実際、古墳時代前期から大量副葬が認められており、副葬品の埋納施設を持つ古墳も存在する。中期になると、膨大な鉄製武器・武器・農具などが捧げられ、人体埋葬を伴わない副葬品専用の小古墳まで出現した。つまり、祖霊に贈与された宝器を納める「クラ」としての機能も、古墳の役割の一つであったのだ。

一方、神祇の痕跡を残す祭祀遺跡では、古墳の副葬品と共通する様々な財や、その模造品類が出土する。特に、

後の神社に継承する神社境内祭祀遺跡の多くは、人の立ち入りを容易に許さない空間―禁足地―に営まれ、「イワクラ」の陰などに多量の財が納められていた。即ち、「文化」的な人工の「古墳」と、「自然」そのものである「神社」は、合わせ鏡のような装置なのである。恐らく倭の王権は、「自然」の霊威を自らの内部に取り込むことにより駆動していたのだろう。

IV 古墳のおわり

―無文字社会から文字社会へ

六世紀末には、畿内において大型前方後円墳の築造が終息した。以後、全国的に大規模古墳の造営が低調となり、大王墓・天皇陵も次第に大型方墳や八角形墳へと変化していく。それからは、古墳のようなモニュメントを築造して社会の統合を図ろうとする時代から、朝鮮諸国や、中国王朝を範にとつて律令を整備し、文書行政によって国家の統治を貫徹しようとする時代への移行期となった。また、寺院の建立も盛んとなり、大宝二(七〇三)年に崩御した持統天皇に至っては、天皇としてはじめて火葬され、叔父かつ夫である天武天皇と合葬されている。ちなみに、飛鳥・奈良時代の大王・天皇は、約半数にあたる推古・皇極(斉明)・持統・元明・元正・孝謙(称徳)の六名八代が女帝であった。その内、真の斉明陵ではないかと考えられている八角形墳の牽牛子塚古墳では、当時最高の葬具であった夾紵棺が採集されており、知られざる天皇陵の実態を物語っている。

(文責・深澤太郎)

國學院大學博物館
企画展「大嘗祭」／特集展示「即位礼」

令和元年五月一日(水)、天皇陛下が即位された。これに伴い、十月二十二日(火)に即位礼正殿の儀、十一月十四日(木)夕方から十五日(金)明け方にかけて大嘗祭が行われた。國學院大學博物館においては、

- ① 特集展示「即位礼」Part1 (会期：平成三十一年四月二十七日(土)～令和元年五月二十六日(日))
- ② 特集展示「即位礼」Part2 (会期：令和元年十月一日(火)～十月二十七日(日))
- ③ 企画展「大嘗祭」(会期：令和元年十一月一日(金)～十二月二十二日(日))

- ① 特集展示「即位礼」Part1
本展示では、國學院大學図書館及び博物館所蔵資料のうち、江戸時代の即位礼、讓位関係資料を中心に展示した。これは、今回の即位が文化十四(二八一七)年に行われた、光格天皇から仁孝天皇への御代替り以来、約二〇〇年ぶりの讓位であったことによる。主な展示資料は、次のとおりである。
・ 御即位図(江戸時代後期、狩野文信画、國學院大學博物館蔵)
・ 御即位式図(江戸時代後期、源秀承画、國學院大學博物館蔵)
・ 即位装束絵図(安永九(一七八〇)

年、國學院大學図書館蔵)

- ・ 劍璽渡御行列書(文化十四(一八一七)年、座田氏彦記、國學院大學図書館蔵)
 - ・ 仁孝天皇御即位御次第(江戸時代後期、賀茂(座田)氏彦記、國學院大學図書館蔵)
 - ・ 光格天皇御讓位記録(江戸時代後期、國學院大學図書館蔵)
 - ・ 黄丹御袍(復元)(現代、國學院大學博物館蔵)
- ② 特集展示「即位礼」Part2
○ 第一幕

- 「即位」の儀式に焦点をあて、近世の讓位と即位に関する絵画・文献資料を始め、近代の即位礼に関連する資料などを展示した。
- ・ 享保二十(一七三五)年十一月三日御即位之図式(桜町天皇)(江戸時代中期、國學院大學図書館蔵)
 - ・ 御即位庭上之図(江戸時代中期、國學院大學図書館蔵)
 - ・ 即位次第(江戸時代中期、國學院大學図書館蔵)
 - ・ 武官装束・挂甲(大正四(一九一五)年、國學院大學博物館蔵)
 - ・ 冠(大正四年、磯谷治宗氏寄託)
 - ・ 即位式(江戸時代中期、國學院大學図書館蔵)
 - ・ 即位装束絵図(安永九(一七八〇)年、國學院大學図書館蔵)

- ・ 平胡籙(大正四(一九一五)年、國學院大學博物館)(第二幕まで)
- ・ 御讓位并御即位宣命之写(享保二十年)(天保十(一八三九)年写、國學院大學博物館蔵)
- ・ 御讓位次第(江戸時代後期、國學院大學図書館蔵)
- ・ 御即位次第(無叙位儀)(延享四(一七四七)年、國學院大學図書館蔵)

○ 第二幕

大正四(一九一五)年十一月に行われた大正天皇の即位儀・大嘗祭に際し、かつて本学の経営母体であった皇典講究所の第二代総裁・竹田宮恒久王が着用された装束(國學院大學蔵)を展示した。

- ・ 冠、袍、靴
- ・ 太刀、平緒
- ・ 小忌衣

このほか、参考として女房装束(現代、國學院大學博物館)を展示した。特集展示「即位礼」Part1, 2ともに、図録・リーフレット等は刊行しなかった。なお、本展示は本機構・吉永博彰助教が中心となっており、装束の着装などは同・田中潤客員研究員が行った。

③ 企画展「大嘗祭」

本機構学術資料センター、同校史・学術資産研究センターの研究成果公開の一部として行ったものである。本展示は、國學院大學所蔵資料のうち、江戸時代のものを中心に、大嘗祭に関わる絵画、古典籍、模型、古文書を展示し、これにより大嘗祭とは何

か、どのような事を行うのかを示そうとしたものである。このうち、校史・学術資産研究センターにおいて進めている、國學院大學図書館所蔵「吉田家文書(近世)」の整理の中で見出された大嘗祭関係資料は、大嘗祭の準備・手配の実態を示したものととして貴重である。資料の翻刻は、本展示に際して刊行した図録(一〇〇頁)に展示資料の写真、論考などとともに取めた(販売終了)。

また、國學院大學博物館が協力したテレビ番組「教えて！よこやさん 特別編「大嘗祭」」(ひらたケーブルテレビ)を、同テレビ局の協力を得て博物館ホールにて上映した。

令和度の大嘗祭は、祭儀の内容が注目されたため、会期中、日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日など、複数メディアの取材を受け、研究成果を社会に還元した。このように、多くのメディアに取り上げていただいたために来館者数も多く、当初、十二月十五日までであった会期を一週間延長し、十二月二十二日までとした。

関連行事として、「衣食住と大嘗祭」(木村大樹・塩川哲朗(ともに本機構PD研究員))をはじめミュージアムトークを三回行い、ほかに閉館後、ナイトミュージアムトークとして、「大嘗宮を復元する」「亀卜について」(いずれも笹生衛(本学教授・國學院大學博物館長))を行った。展示資料は図録を参照していただきたい。

(文責：大東敬明)

令和元年度 國學院大學博物館活動報告

一、活動報告

平成三十一・令和元年度は、博物館の展示公開として、企画展六回、特集展示を十二回開催し、展示と連動した講演会やミュージアムトークをはじめ、各種企画・イベントを実施した。また、昨年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策(常設展の見直し、多言語化、ミュージアムショップの運営、環境整備)を継続・推進した。その他、ICOM(国際博物館会議)への参加や外国人向け日本文化(狩衣着装)体験ワークショップを開催するなど、広く海外も視野に入れた取り組みに加え、渋谷区内の小中学校向けの博物館利用の紹介や、渋谷駅前観光案内所との連携など、地域性を活かした教育普及活動に力を入れた。

二、展示公開(表1)

【企画展・特集展示】

・企画展「和歌万華鏡―万葉集から折口信夫まで―」(展示リーフレット刊行)、会期:平成三十一年四月二十七日(土)〜令和元年六月二十三日(日)。主催:当館。
 ・企画展「浮世絵ガールズ・コレクション―江戸の美少女・明治のおききちゃん―」(展示図録刊行)、会期:令和元年六月二十九日(土)〜八月二十五日(日)。主催:当館。

表1 平成31・令和元年度 展示内容と関連事業

展示(会期)	関連事業
和歌万華鏡―万葉集から折口信夫まで―(前期:R31.4/27~R1.5/26、後期:R1.5/28~6/23)	講演会 5/11 辰巳正明(本学名誉教授)「折口信夫から万葉集へ」 ミュージアムトーク 5/25 荒木優也(本学兼任講師・本学客員研究員)「歌書のみかた」、6/1 荒木優也「恋歌をよむ」、6/15 渡邊卓(本学准教授)「人の心を種として―歴史的仮名遣いと国字―」
浮世絵ガールズ・コレクション―江戸の美少女・明治のおききちゃん―(R1.6/29~8/25)	講演会 7/27 岩下尚史(本学客員教授・作家)・藤澤崇(本学教授)「女性美と粋―江戸・明治の美人に学ぶ―」 ワークショップ 8/5 うきよえ ワークショップ「浮世絵ゆめとデザイン?」 ミュージアムトーク 7/20 藤澤崇「浮世絵×BIJIN.くらべ」
有栖川宮家・高松宮家ゆかりの複製文化(R1.8/31~10/27)	ミュージアムトーク 9/7 長谷古美奈子(学際院大学史料館学芸員)・高野裕基(本学助教)「國學院大学×近代皇室文化」
大嘗祭(R1.11/1~12/22)	ミュージアムトーク 11/9 吉永博彰(本学助教)「女性天皇の大嘗祭―後醍醐天皇の事例―」、11/16 木村大樹・堀川節朗(ともに本学PD研究員)「衣食住と大嘗祭」、11/23 大塚朝明(本学准教授)「大嘗祭と四季のまつり」 ナイトミュージアムトーク 11/12 館生衛(当館館長・本学教授)「大嘗祭を振り返る」、12/10 館生衛「亀トについて」
古物を守り伝えた人々―Antiquarians―(R1.12/25~3/15)	シンポジウム 3/7 「幕末維新期の好古家ネットワーク」 堅田智子(流通科学大学 米崎浩美(武蔵野ふるさと歴史館)、山本命(松浦武四郎記念館)、三浦泰之(北海道博物館)、長谷川一(國馬学院)、菅生雅(総合教育委員会)、徳田誠志(宮内庁書陵部)、内川隆志(國學院大学)、山本哲也(新潟県立歴史博物館) 予定 ミュージアムトーク 1/25 内川隆志(当館館長・本学教授)「古物を守り伝えた人々 Antiquarians」、2/1 成澤麻子(静嘉堂文庫司書)「静嘉堂 松浦武四郎コレクション」、2/15 山口卓也(関西大学博物館学芸員)「關西大学 本山彦一コレクション」、2/29 内川隆志「松浦武四郎の大首飾りとヒストリーの勾玉」 予定
春の特別列品―神の新たな物語―熊野と八幡の縁起―(R2.3/20~5/10) 予定	
即位礼(H31.4/27~R1.5/26)	
夏越祓(R1.5/28~6/23)	
三条教團と教派神道(R1.5/28~6/23)	
高倉家調遣―近世の上皇さまの御召し物―(R1.6/29~7/21)	ワークショップ 7/5 「Experience! Japanese Culture・Enjoy wearing traditional Japanese clothing "Karigumi"」
藩者たちの中世(前期:R1.6/29~7/21、後期:R1.7/23~8/25)	ミュージアムトーク 7/13 堀越祐一(本学兼任講師・本学客員研究員)「藩者たちの中世」
高倉家調遣控 文様絵巻「江戸時代のデザイン帖」(R1.7/23~9/29)	
学徒出陣と國學院大学―出陣学徒の「こぼれ」―(R1.8/31~10/27)	
王様と古墳―後園緑合の象徴―(R1.9/14~10/27)	ミュージアムトーク 9/28 館生衛「大型古墳と地域開発と神祭り」、10/5 青木敏(本学准教授)「古墳築造技術の歴史的意義」、10/26 古谷敏(本学兼任講師・本学客員研究員)「古墳時代の空間構造」、10/27 深澤太郎(本学准教授)「古墳時代の観音講道と皇位継承」 ナイトミュージアムトーク 9/27 深澤太郎「古墳とは何か―本展のみどころ」
即位礼 Part 2 (第1幕:R1.10/1~10/27、第2幕:R1.11/1~12/22)	
吉田家伝来文書にみる花押・印判 (R1.11/26~12/22)	
古事記アートコンテスト 受賞作品展 (R2.1/11~3/15)	
ぼち袋 (R2.1/12~3/15)	

・企画展「有栖川宮家・高松宮家ゆかりの新収蔵品」(展示図録刊行)、会期:令和元年八月三十一日(土)〜十月二十七日(日)。主催:当館。
 ・企画展「大嘗祭」(展示図録刊行)、会期:令和元年十一月一日(金)〜十二月二十二日(日)。主催:当館。詳細は12頁を参照。
 ・企画展「古物を守り伝えた人々―Antiquarians―」(展示リーフレット刊行)、会期:令和二年一月二十五日(土)〜三月十五日(日)。主催:当館、共催:関西大学博物館。
 ・企画展「春の特別列品―神の新たな物語―熊野と八幡の縁起―」、会期:令和二年三月二十日(金)〜

五月十日(日)を予定。主催:当館。
 ・特集展示については表1を参照。
 三、教育普及
 教育普及事業では、展示公開に關連するミュージアムトーク、シンポジウム、講演会、ワークショップ等を実施した(詳細は表1を参照)。
 また、当館の常設展示を紹介するブックレットをリニューアルし、ミュージアムショップで販売した。その他、京都で開催されたICOMに参加し、IMAC(大学博物館・コレクション国際委員会)のオフサイトミーティングにて大学博物館としての当館の取り組みを発表した。また、渋谷区内の小中学校向けにワークショップ・団体見学等の博物館利用を紹介し、授業での博物館利用や親子でのイベント参加を促進した。さらに渋谷駅前の観光案内所「shibuyasan」との連携による出張展示や見学ツアーに協力するなど、地域連携の強化を図った。

本年度の入館者数は、令和二年一月末日現在、六万人を超え、七万人台の達成を見込んでいる。今後も本学の研究・学術資料の公開を中心に、国内外のより多くの方々に親しまれ、広く活用される博物館運営を目指していく。
 (文責:國學院大學博物館)

四、環境整備・営繕
 環境整備・営繕は、公開承認施設を目標とした展示環境改善の一環として、ローケースの改修を行った。また、展示空間の空気質・温湿度を良好なレベルに維持させるための施策やIPM(総合的有害生物管理)を継続して実施し、資料保護・管理運営の質的向上を図った。
 五、運営支援
 ミュージアムショップは開設から一年が経過し、展示図録を中心に書籍やグッズの販売を拡充した。また、ウェブサイトで積極的な情報発信を行い、来館者、メディアからの反響が多く寄せられた。加えて英語による情報発信、館内展示解説の多言語化を促進し、東京五輪に向けたインフラ整備と外国人来館者の集客を図った。

表2 平成31・令和元年度入館者数

月	(名)
4月	4,700
5月	5,901
6月	5,629
7月	7,337
8月	9,437
9月	3,964
10月	5,818
11月	9,455
12月	6,931
1月	1,937
合計	61,109

令和2年1月末日現在

彙報

会議

○全体

- ・令和元年度第二回運営委員会、令和元年十月十七日(木) 十六時五十分～十六時三十分、若木タワー四階会議室〇五
- ・令和元年度第三回運営委員会、令和元年十一月七日(木) 十六時四十分～十七時、若木タワー四階会議室〇五
- ・令和元年度第三回企画委員会、令和元年十月十六日(水) 十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第四回企画委員会、令和元年十一月六日(水) 十一時～十一時四十五分、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第二回人事委員会、令和元年十一月六日(水) 十二時～十二時三十分、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第一回教員等資格審査委員会、令和元年十一月六日(水) 十二時三十分～十三時、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第五回企画委員会、令和二年一月十五日(水) 十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第二回教員等資格審査委員会、令和二年一月十五日(水) 十五時～十六時、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第四回運営委員会、令和二年一月十六日(木) 十三時四十五分～

～十四時二十五分、若木タワー地下一階会議室〇二

○日本文化研究所

- ・令和元年度第二回所員会議、令和元年七月三日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第三回所員会議、令和元年九月二十五日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第四回所員会議、令和元年十月二十三日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度第五回所員会議、令和二年一月八日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室〇六

○学術資料センター

- ・令和元年度第二回学術資料センター会議、令和元年九月二十五日(水) 十時～十時四十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・令和元年度第三回学術資料センター会議、令和元年十二月十八日(水) 十一時～十一時十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○研究開発推進センター

- ・令和元年度第一回研究開発推進センター会議、令和元年九月二十六日(木) 十二時三十分～十三時、A M C棟五階会議室〇六

○校史・学術資産研究センター

- ・令和元年度第二回校史・学術資産研究センター会議、令和元年九月二十四日(火) 十四時三十分～十五時、A M C棟五階プロジェクトルーム二

・令和元年度第三回校史・学術資産研究センター会議、令和元年十二月二十日(金) 十二時十分～十二時三十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○國學院大學博物館

- ・令和元年度第二回國學院大學博物館会議、令和元年九月二十五日(水) 十一時～十一時十五分、A M C棟地下一階國學院大學博物館ワークショップスペース
- ・令和元年度第三回國學院大學博物館会議、令和元年十二月十七日(火) 十八時～十八時五十分、A M C棟地下一階國學院大學博物館ワークショップスペース

○古事記学センター

- ・令和元年度第二回古事記学研究実施委員会、令和元年十一月七日(木) 十七時～十七時十五分、若木タワー四階会議室〇五

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・国際交流研究会、令和元年八月一日(木) 十四時～十七時三十分、A M C棟五階会議室〇六
- ・令和元年度公開学術講演会「折口信夫と神道・国学」、令和元年十一月十六日(土) 十五時～十六時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、講師〓阪本是丸(本学教授)

○日本文化研究所

- ・令和元年度第一回宗教文化教育に関する研究会及びワークショップ、令和元年度六月二十九日(土) 十二時三十分～十八時、A M C棟五階会議室〇六・一階館一〇一教室、研究会での話題提供者〓岡田正彦(天理大学教授)、宮本要太郎(関西大学教授)、岩野祐介(関西学院大学教授)、飯嶋秀治(九州大学准教授)、川島堅二(東北学院大学教授)、ワークショップ講師〓岩元陽子(N P O法人M I Cかながわ英語通訳・派遣コーディネーター)、カイン恵理子(合同会社クロスブリッジ代表)、ワークショップでの指定討論者〓井上順孝(本学名誉教授)、矢野秀武(駒澤大学教授)、板井正斉(皇學館大学准教授)
- ・令和元年度第一回国学研究プラットフォーム公開レクチャー「井上正鐵門中・禊教と国学」、令和元年十一月十四日(木) 十八時三十分～二十時、A M C棟五階会議室〇六、講師〓荻原稔(国際日本文化研究センター共同研究員)
- ・令和元年度第二回宗教文化教育に関する研究会、令和元年十一月三十日(土) 十四時～十七時三十分、A M C棟五階会議室〇六、発表者〓飯嶋秀治、話題提供者〓井上順孝、宮本要太郎、川島堅二、黒崎浩行(本学教授)
- ・国際ワークショップ「世界と次世代に伝える日本の伝統文化」、令和元年十月十八日(金) 十四時三十分～十六時、A M C棟一階常磐松ホール、登壇者〓十代目松本幸四郎(歌舞伎役者)、カミングス・アラン(ロンドン大学S

○AS)、司会||平藤喜久子

・国際シンポジウム「神話・伝承の教材化と実践―『子ども古事記』がひらく世界―」、令和元年十月二十六日(土)十三時~十七時三十分、AMC棟一階常磐松ホール、パネリスト||吉永安里(本学准教授)、原田留美(東京都立大学教授)、シャロンドン・エミリア(元関西学院大学講師)、岩瀬由佳(本学教授)、討議司会||成田信子(本学教授)、総合同会||松本久史(本学教授)、読み語り||小山菜美(声優)

・国際ワークシヨップ「近現代日本の宗教文化と「古代」」、令和元年十二月一日(金)十二時~十六時、米国・ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所、発表者||遠藤潤(本学教授)・齊藤智朗(本学教授)・平藤喜久子・星野靖二

・第一回国學院大學―南開大学国際協働シンポジウム、令和元年十二月十四日(土)~十七日(火)、中国・南開大学、発表者||根岸茂夫(本学教授)・岩瀬由佳(本学教授)・渡邊卓・韓立紅(南開大学教授)・劉雨珍(南開大学教授)・王凱(南開大学副教授)・于君(南開大学講師)・孫雪梅(南開大学副教授)・王新新(南開大学教授)

出張

○全体

・星野靖二、「国際ワークシヨップ」近現代日本の宗教文化と「古代」のため、令和元年十月二十七日(日)~十一月四日(月)、米国・ハーバード大学エド

ウィン・O・ライシャワー日本研究所

○学術資料センター

・深澤太郎・菊地大樹、「館蔵中国資料の調査研究および出版協議」のため、令和元年七月二日(火)~四日(木)、中国・北京市

・内川隆志、「堺市博物館における百舌鳥古墳群関連資料の調査」のため、令和元年七月十六日(火)、大阪府堺市

・深澤太郎、「柳田康雄写真資料に関する調査および、研究協定に基づく西南学院大学博物館訪問」のため、令和元年十月十六日(水)~十八日(金)、福岡県糸島市・福岡市

・深澤太郎・尾上周平、「本学図書館所蔵金田一文庫「アイヌ関係資料」(北海道短期大学部所管) 熟覧および、高龍寺所在石造物調査」のため、令和元年十月二十三日(水)~二十五日(金)、北海道滝川市・函館市

・深澤太郎・尾上周平、「的矢無縁墓地所在の石造物調査」のため、令和元年十二月十九日(木)~二十日(金)、三重県志摩市

○研究開発推進センター

・宮本誉士・大東敬明、「北海道神宮の研究」に関する調査、令和元年六月二十八日(金)~二十九日(土)、北海道札幌市

・古沢広祐・黒崎浩行・茂木栄、岩手県・宮城県における東日本大震災被災地に関する調査、令和二年一月十二日(日)~十五日(水)、岩手県陸前高田市、宮城県東松島市

○國學院大學博物館

・佐々木理良、「令和二年度企画展「居家以岩陰遺跡発掘調査報告(仮)」の企画・運営に係る現場視察」のため、令和元年九月一日(日)~二日(月)、群馬県吾妻郡長野原町

・内川隆志・及川聡・佐々木理良、「I COM京都大会2019および全国博物館大会出席」のため、令和元年九月五日(木)、京都府京都市

・内川隆志、「堺市博物館、関西大学博物館及び図書館所蔵資料等の借用」のため、令和二年一月十三日(月)~十五日(水)、大阪府堺市・吹田市

・内川隆志、「長岡市立中央図書館所蔵資料等の借用」のため、令和二年一月十六日(木)~十七日(金)、新潟県長岡市

○古事記学センター

・渡邊卓、外部評価委員への報告及び陵墓データベースに関する調査のため、令和元年七月十四日(日)~十六日(火)、大阪府大阪市

・武田幸也、大阪天満宮訪問及び住吉大社文献調査のため、令和元年八月七日(水)~九日(木)、大阪府大阪市

・小平浩衣、帯廣神社訪問のため、令和元年八月二十三日(金)~二十四日(土)、北海道帯広市

・渡邊卓、開成山大神宮訪問のため、令和元年八月十一日(日)、福島県郡山市

・渡邊卓、鹽竈神社訪問のため、令和元年九月八日(日)、宮城県塩竈市

・渡邊卓、国際シンポジウム事前打ち合わせ及び伊勢神宮調査のため、令和元年十月七日(月)~九日(水)、京

都府・三重県伊勢市

・渡邊卓・武田幸也、榎原神宮訪問及び住吉大社文献調査のため、令和元年十月十九日(土)~二十日(日)、奈良県・大阪府

・山口輝幸、岡山縣護國神社・倉敷芸術科学大学等訪問のため、令和元年十月三十日(水)~三十一日(木)、岡山県

・遠藤潤・齊藤智朗・平藤喜久子、コロンビア大学及びハーバード大学ライシャワー研究所の研究者との学術交流のため、令和元年十月三十日(水)~十一月六日(水)、米国・コロンビア大学・ハーバード大学

・根岸茂夫・岩瀬由佳・渡邊卓、南開大学との国際協働シンポジウムのため、令和元年十二月十四日(土)~十七日(火)、中国・南開大学

刊行物

○全体

・研究開発推進機構『機構ニュース』通号二十五(令和元年六月二十八日発行)

○学術資料センター

・学術資料センター(神道資料館部門)『祓の信仰と系譜』(令和元年六月三十日発行)

資料紹介

高松宮家旧蔵 ボンボニエール

本資料は、平成三十（二〇一七）年に國學院大學に新収蔵された高松宮家旧蔵のボンボニエールである。

本学の経営母体であった皇典講究所の初代総裁は、有栖川宮職仁親王であった。明治十五（一八八二）年の就任から薨去される同十九年まで、本所の維持・発展に尽力された。有栖川宮家は第十代の威仁親王の御子息である裁仁王が早世されたことで絶えようとした。これを憐れんだ大正天皇は、第三皇子の宣仁親王に高松宮（有栖川宮の旧号）の称号



柏葉篋形



入目籠形



八稜鏡形鳳凰文

を受け、有栖川宮家の祭祀は宣仁親王へと継承されることとなった。

宣仁親王は本所の総裁にはなられなかったが、創立五十周年、七十周年、八十周年、百周年の節目の式典に御台臨されるなど、有栖川宮家と所縁の深い本学に対して常に御高配を賜った（創立七十周年記念式典において賜った御言葉は、本紙No.20〔通号〕にて紹介した）。

このような経緯から本学は、平成八（一九九六）年に高松宮宣仁親王妃喜久子殿下の御高配により、有栖

川宮家・高松宮家旧蔵資料を拝領し、今日に至るまで調査・研究・保存に努めてきた。そして、平成三十年には、新たに高松宮家旧蔵資料を収蔵することとなった。

新収蔵された資料群には、御歴代の遺墨をはじめ、高松宮家が大正天皇・貞明皇后から継承された工芸品などの品々や喜久子妃殿下の御婚禮調度品などが収められており、ここに紹介するボンボニエールはその一部である。

ボンボニエールは、ヨーロッパでお祝いの場に添えられる砂糖菓子（ボンボン）を入れる小箱であり、我が国では、近代以降に宮中の饗宴において記念品として贈られる菓子器や工芸品をボンボニエールと称している。この度、本学は一二〇点に

およぶボンボニエールを新たに収蔵した。その中でも大正天皇の御大礼に際して作成されたものは、時宜を得て、とりわけて注目される。

大正天皇の御大礼に伴う大嘗祭は、大正四年十一月十四・十五日に京都において斎行された。翌日からは大饗が催され、出席者には大嘗祭の祭具を模したボンボニエールが遣わされた。

同資料は、本学博物館企画展「有栖川宮家・高松宮家ゆかりの新収蔵品」（令和元（二〇一九）年八月三十一日（土）～十月二十七日（日））において展示したが、再調査の上、本学博物館校史展示室において適宜展示される予定である。

（文責・高野裕基）